

あの日見た景色 ～Be
My Idol～

小早川 リPPER

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

765プロダクションより39プロジェクトという39人のアイドルをデビューする。

その中の一人として選ばれた百瀬莉緒は周りの子たちよりも年が上な事などいろいろなことに苦悩しつつトップアイドルになるため他のアイドル達と切磋琢磨し駆け抜けていく。

※主に765アイドルですが346プロ等其他事務所のアイドル達も登場します

目次

プロローグ | 1

第1話「歩き始めた運命」 | 4

プロローグ

「ねえプロデューサーくん．．．ひとつ聞いてもいいかな？」

頬を赤らめながら一人の女性が隣の男性に呟く。

「私ってアイドルなんか合っていないのかな．．．魅力なんてないのかな．．．」

しかし隣のプロデューサーと呼ばれた男性は何も言わず目の前にお酒を口にした。

「今日だって監督の人に怒られたし、レッスンの時も調子乗ってトレーナーの人に迷惑をかけちゃったし．．．ううなんか言つてよ〜」

「いきなりどうした？そんな酔ってる風には見えないぞ．．．いや大分飲んだな」
そう言つて女性は目の前にお酒を一口飲みし男性を見つめた。

しかし見つめてるうちに恥ずかしくなったのか彼女は目を逸らした。

「魅力がなかったら社長直々にスカウトなんかされないだろう？」

それをされたつてことは莉緒は十分に魅力があるつてことだよ」

「あと、このりんごの果実酒うまいぞ？あとこのつまみも。」

プロデューサーが慰めると莉緒と呼ばれた彼女は飲みかけのグラスを置いて

ため息をつく。

「もうプロデューサーくんはそうやってすぐに話を逸らそうとする・・・

あれはアルコールが入ってたからっていうのもあるし・・・

プロデューサー君は私のことどう思ってるの？」

「確かに調子乗ったりする時や空回りする時もあるかもしれないけど、

魅力が無い訳じゃないぞ」

「それだと説得力がないわよ」

机にもたれながらいじけている。どうやら仕事が上手くいっていないらしい。

「莉緒、今回のプロジェクトはな・・・かなり力を入れている。

それは重要だからだ。そんな重要なプロジェクトに魅力がない人を入れるか？」

「うう、確かにそうだけど・・・でも・・・」

そして莉緒は机にぐったりした。状態からするにかなり飲んでいるようだ。

「そろそろ時間だ、これ以上は明日の仕事に響く。今日は俺が送っていくから、

歩けるな？」

「うん、ありがとう」

歩けると言いつつ立つた瞬間にふらふらして満足に歩けるような状態ではない。

右肩をプロデューサーが支えながらなんとか歩けるといった様子だ。

そしてやっと店から出ようとしたところで莉緒は目を逸らしながら言った。

「プロデューサーくんは・・・私のこと・・・好き・・・？」

「さあな・・・酔っててよくわからん」

数秒立ち止まってから店を出て夜の人波に消えていった。

|

第1話「歩き始めた運命」

（数日前）

窓から射す光は赤く、夕方ということを示していた。

ここはレッスンルーム。765プロダクションの所有する劇場の中にある。

アイドル達が日夜公演に向けてレッスンをしている。

「はぁ・・・つ、疲れたわぁ・・・」

「おつかれ莉緒ちゃん、最近すごいレッスン頑張ってるわね」

「おつかれ歌織ちゃん、あらドリンクありがと♪」

ドリンクを受け取った莉緒はレッスンルームの端に座る。隣に歌織と呼ばれた女性が座る。

彼女は桜守歌織。百瀬莉緒と同時期に765プロダクションに入ったアイドルで

なおかつ同じ年のため二人が一緒にいることは多い。

「ねえ莉緒ちゃん？最近頑張ってるみたいだけど大丈夫？」

「ええ、大丈夫よ。ありがとねっ」

そう言つて彼女は笑う。しかし歌織にはそれが作り笑いということがすぐ分かつたが、あえて何も言わなかつた。

「じゃあそろそろ私は営業があるから・・・莉緒ちゃん、あんまり無理しちゃだよ?」
「大丈夫よ、ドリンクありがとね」

歌織はその場から去る。その表情は曇っていた。ドアを開けると歌織と同身長程の女性がいた。

「ごきげんよう、歌織さん」

「あら千鶴ちゃん、お仕事終わったの?」

このセレブリティに溢れる女性は二階堂千鶴。歌織や莉緒よりも2歳下のアイドル。二人からよく飲みに連れてかれていた。

「あちらには莉緒さんがいらつしやいますわね・・・最近根を詰めすぎてるようで心配すわ」

「うん・・・どうしちゃったのかしら、聞いても何も教えてくれないの」
「このみさんとか知っているのではないのでしょうか?」

「そうね・・・かもしれないわ・・・ってやだ、ごめんなさい千鶴ちゃん。私この後営業があつたの」

「それはいけませんわ、足を止めさせてしまい申し訳ございません」

そういつて歌織は急ぎ足で営業に行った。

「さて・・・そろそろ出てきても良いのではなくて？プロデューサー？」

千鶴が廊下の曲がり角の部分を見るとそこにはプロデューサーがいた。

「何か莉緒さんに用事でも？」

「あるっちゃあるんだが、それはまた後日で。莉緒の様子を見に来たんだよ。

あいつ最近頑張ってるからな、飲みにも誘おうかなって。千鶴さんも来る？」

「いえ、わたくしは遠慮しておきますわ」

「・・・やっぱり千鶴さんには居酒屋なんかには合わないか・・・ごめん」

「え、ええそうですわね・・・おーっほっほっほっ・・・ゲホッ、ゲホッ・・・では失礼

いたしますわ」

そう言つて千鶴は帰つていった。あたりは先ほどよりも暗くなつていた。